

2021年10月31日(日)

老球の細道638号

10月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

孫娘の小学校の長距離走会を見に行ったら断トツ1位の子がいた。1年生ながらミニバスケットボールのチームで練習しているという。バスケットボールの練習の凄さを思い知らされた。危機感を抱いた私は幼稚園の孫息子を毎日「会津総合運動公園」へ連れて行って色々な運動をさせた。孫の運動神経育成は爺の責任。同じように孫を連れて来ている爺さんたちと知り合う。75歳の爺友さんから「同じ年くらいか?」と言われショック。

1 読書から

◆「“見る目”とは“結果”から“原因”を推定できる“目”を持つこと」中村敏雄著『スポーツの見方を変える』平凡社：バスケットボールのゲームを観戦していると色々な人が色々な批評をしている。勝敗、シュートの成否だけで一喜一憂の見方をするだけでなく、もっと奥の深い観察眼を持ちたい。たくさんゲームを見ること。他競技の解説者の解説を聞くこと。

2・新聞から

◆「事実のない世界は真実と信頼のない世界だ。最も危険な時は最も重要な時でもあり、今はジャーナリストでいることが最良の時だ」〈朝日：命がけ表現の自由〉：ノーベル平和賞を受賞したフィリピンのジャーナリスト、マリア・レッサさんの受賞後の言葉である。世界には逮捕や生命の危険にさらされながらも、ひるまず政権に批判的な報道を貫き、表現の自由を守っている勇気ある人びとがいる。事実を眉に唾をつけて直視し、批判することを忘れたくない。物事の進歩、発展は批判することから始まる。

◆「私は調和の中で生きることができません。多様性は大変だし、面倒くさい。それでも、『No Pain, No Gain (痛みなくして得るものなし)』なのだ」〈朝日：多事奏論〉：ノーベル物理学賞を受賞した真鍋叔郎さんの言葉である。米国で行われた殺人事件の容疑者を割り出す実験で、知り合いだけのグループより部外者がいたグループの方が正答率高かった。部外者が入ることで生じた「ぎこちなさ」が議論を慎重に行わせて影響を与えたという。居心地のいい組織でないからこそ技術革新が生まれる。チームも同じか。

◆「一度の人生を豊かに過ごしたい、自分の人生をものにしたいって思うと、勝敗ってというのがすごく小さく思えてくる」〈朝日：小平奈緒(スケート)〉：平昌冬季五輪から4年。また小平奈緒が戻ってきた。彼女の競技、人生に向かう姿勢には哲学を感じさせられる。バスケットボールによってどれだけ自分の人生を豊かにできるか、人間力を高めることができるか。勝敗はそのための材料でしかない。

◆「人間の悪知恵でできた核兵器だから、人間の理性で潰すしかない」〈朝日：天声人語〉：年を取れば悠々自適の生活というが、平井さんは死ぬまで原水禁運動にまい進してきた。私も生きた証を得るために、スケールは小さいが死ぬまでまい進できる仕事をやり遂げたい。ネバー・ギブアップ、ネバー・ツー・レイト(今からでも遅くない)、ネバネバ納豆!